

「Somehow the mosaic looks nice」の動機

私はこれまで特定の場での鑑賞を必要とする作品をたびたび作ってきましたが、今回はギャラリーという場で成立するものを作りたいと思いました。そして現在、「箱庭」をテーマにしたインスタレーションを中心に展示を構成しようと考えています。この着想のきっかけは、ギャラリーや美術館で作品をインストールする作業が箱庭遊びのようだと思っていたことにあります。

箱庭遊びとは、小さな箱の中に人形や景観を構成するオブジェを用いて一つの景観を作る遊びです。また、遊戯療法として、患者の非言語的表現を読み取るためや、自己治癒力を高めるために行なわれています。もし、作品のインストールが箱庭療法的であると、セラピストは鑑賞者にあたりますが、作品を鑑賞するという前提がある場合、作家と鑑賞者の立場は逆転するでしょう。しかし、私は自身の経験から、作家と鑑賞者の関係は一言で言い切れるほど単純ではないと感じます。形式的に独立した作品を集合体として捉え、それに一つの統合性や一連のリズムを与えることができる作家であっても、天才的でなければいけないのはむしろ鑑賞者であり、無意識の法則を知らなければ、その人の箱庭を完全に理解することはできません。また、作家は必ずしも鑑賞者の理解を必要としていないことから、作品の配置行為は元来箱庭遊び的な性質を強くもっており、だからこそ公の場では第三者のキュレーションが不可欠であると考えていました。

そのような考察を経て、私は自身の言語化できない思考や無自覚の覚醒を促しながら箱庭を作ることを思いつきました。これは、無目的に物体に役割を与え、その配置によって思考を可視化させたような気分を味合うためではなく、「自分がこれまで言葉にできなかった、もしくは言葉にできなかったもの」を意識下で探る行為であるということです。この作業は多くの作家が制作中に体験することだと思いますが、思考の運動を導く情報を自らキュレーションし、箱庭を体現する過程を提示することが今回の試みなのです。

この展示タイトルは、明らかにしたら面白くないことでも、よく見えないときは面白く見えるよね、という意味です。日本語のモザイクの意味と、モザイク画の二つの意味が重なっています。何かを隠す目的で用いられるモザイクとモザイク画は性質が全く違いますが、単体では意味を持たないピースが集まって記号や寓意、象徴性を形作るといったように、状況によって意味を変えるという点では同じかもしれません。箱庭遊びも同様、状況の配列次第で見え方は全く変わります。この和訳無しのタイトルは、答えのないパズルのピースでただ無造作に遊んでいるにも関わらず、目を逸らしたくなる状況に遭遇してしまうかもしれないということを認識して鑑賞してもらいたいという思いで選びました。

なかなか上手く説明できませんが、私自身がよくわからないものはよくわからないもののままでいいと認める、また、鑑賞者が私の思考の中に迷い込むことができればゴールなのかもしれません。このようなことを考えています。

2015年3月

中野 岳